



1999年 ブサン国際映画祭 グランプリ受賞作品
2000年 ロッテルダム国際映画祭 コンペティション部門正式出品作品

タイムレスメロディ

第9回 PFFスカラシップ作品

監督：奥原浩志

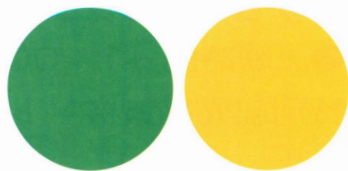
1999 / 35mm / color / 95min

OKUHARA Hiroshi's assured and elliptical debut is a haunting ode to the gray dawns of life when you awaken, startled by the inevitability of life and of death.

Chikako is a lovely brooding young woman, unable to find direction. Kawamoto is a gentle musician, unable to articulate his needs. A piano tuner searches for his lost father, a tug boat pilot is plagued by his past. The characters drift in and out of a pool hall in the shadowy nights and gray dawns of Yokohama. Each composing a timeless melody in a landscape entirely out of time.

Photograph: IMAI Tomoki / Design: MACHICHI

どうして、
どうしてそんなに優しくするの……



1999年 プサン国際映画祭 グランプリ受賞作品
2000年 ロッテルダム国際映画祭 コンペティション部門正式出品作品

タイムレスメロディ

第9回 PFFスカラシップ作品

監督：奥原浩志

1999 / 35mm / color / 95min

河本：青柳拓次(あおやきたくじ)
チカコ：市川実日子(いちかわみこ)
田村：近藤太郎(こんどうたろう)
チカコの母：余貴美子(よきみこ)
杉浦：若松武史(わかまつたけし)
篠田：木場勝己(きばかつみ)

いい学校を出るとか、大企業に就職するとか。そんな“豊かな人生”の神話は、この数年で完全に崩れた。代わりにはっきりしてきたのは、好きなものを選んでそれを大切に、自分が決めたルールを黙って守り続けるといった、自分の中にスタンダードを持つことが、本当の心地良さの指針になるということだ。「タイムレス メロディ」が“恋人未満”や“空白のある親子”という、はかない関係を繊細に描きながらも、ある種の張り詰めた心地良い空気が全編に流れているのは、登場人物それぞれが、そうした豊かさをもって毎日を生きているとわかるからだろう。

この作品が一般公開第1作となる奥原浩志は、そんな人々を、まるで優しい音楽のように1本の映画に描いた。古ぼけたビリヤード場でアルバイトしながら音楽をつくる河本(青柳拓次)。彼の音楽仲間であるチカコ(市川実日子)。一通の手紙によって、ふたりのもとに呼び寄せられるピアノ調律師の田村(近藤太郎)。3人の運命を結び付ける中年男・篠田(木場勝己)。彼らはみな人生に対して決して器用ではないが、それぞれが自分だけの音を持つ。「これしかできない」という謙虚さと強さで奏でられる彼らの音楽は、心に染みる。まるでセッションするように、少し近づき、また離れていく様子も、心に染みる。

主演、ミュージシャンとしてLITTLE CREATURESで活躍する青柳拓次と、雑誌「Olive」でブレイクした人気モデルの市川実日子。ともに映画初出演ながら独特の存在感で、この映画の忘れ難さに大きく貢献している。

戻りたくても戻れない場所が人生には沢山ある

朝、僕はビリヤード台の上で目をさました。身を起こし、その古ぼけたビリヤード場の室内を見まわした。そこにはもう誰もいなかった。友人達は皆それぞれどこかに去ってしまっていた。そして彼らが二度と戻ってこないことを僕は知っていた。とても静かだった。どういわけか僕は少しほっとした気分だった。いろんなことがあった。僕はいつも速くから眺めていた。人がひとり死んだ。僕や彼らよりずっと年の離れたその男は、とても優しい人間だった。満ち足りたと呼ぶにはほど遠い人生だったが、それでも決して悪い死に方ではなかったはずだ。なにしろ彼は腐った運河の底で死んでもおかしくなかったのだから。座ると尻の落ちてしまっような店のソファの上で男が眠りながら死んでいった時、その傍らでは彼の若い友人がピアノを弾いていた。ずっと昔に聴くはずだったピアノの音を、死ぬ間際になってようやく聴いたのだ。それ以外にも奏でられた音楽はたくさんあった。ひとりが別のひとりを想ってギターを弾いたこともあったし、3人が3人のために即興で演奏したこともあった。それらの音楽の気配は、それが彼らの存在した証であるかのように、今でもそこらじゅうに重なり合いながら残されていた。磨りガラスの向こうから陽の光がやわらかく差し込んできた。僕はその光を心に留めておこうと思った。そして僕は映画を作ることにした。彼らは実在の人間ではなかったし、聴こえていた音楽も、感じていた光も、すべて僕の中だけに存在していたものだったのだけれど、映画にすれば、もしかしたらそれを観た誰かに伝わるかもしれないと思ったからだ。(奥原浩志)

奥原浩志プロフィール

1968年生まれ。映写技師のバイトを通して映画づくりへの興味が芽生える。8ミリフィルム作品「ピクニック」(93)「砂漠の民カザク」(94)が2作連続PFFアワードにて受賞。その後第9回PFFスカラシップ作品企画コンペにて、本作「タイムレス メロディ」が権利を獲得。99年製作を開始。



びあ株式会社/株式会社タキコーポレーション/サンセントシネマワークス株式会社/株式会社レントラックジャパン 提携作品
製作=矢内廣 ■プロデューサー=仙頭武則/森本英利 協力プロデューサー=甲斐真樹/林正樹/天野真弓
監督・脚本=奥原浩志 撮影=福本淳 照明=神宮信 録音=西岡正己/福田伸 美術=林千奈 編集=奥原浩志/仙頭武則 助監督=大森立嗣 音楽=青柳拓次
配給=びあ 宣伝協力=楽舎

7月23日(日)～7月28日(金)ロードショー

●上映時間→1:00/2:55/4:50/6:45～8:20●

特別前売鑑賞券 ¥1400にて好評発売中!
(当日・一般=¥1700/学生=¥1400)

ホワイト梅田原の広場M-10石比呂館A5分
最旬ミュージアムスクエア
06・6361・0088 www.oms.gr.jp

